



Be creative !

ずっと推しのつもりでした



『僕には鳥の言葉がわかる』という本をご存じか。東京大学准教授であり、動物言語学者として活躍する鈴木俊貴さんの初の単独本として、今、注目を集めている本だ。この本に出合った時、「私は前から先生の推しでしたよ。」と本に語りかけた。自分が密かに注目をしていた人が、にわかに脚光を浴びるのはうれしいものだ。私がこの鈴木先生を知ったのは、2022年の初めのころの新聞記事であった。感銘を受けて、すぐにPTA新聞の校長巻頭言に彼を紹介する文章を書いたので、記憶に鮮明に残っていた。



昨年のPTA新聞にカブトムシの観察に熱中する小学生の柴田君のことを書いた。一年後のこの4月、彼によく似た人を同じく朝日新聞を通して知ることとなる。京都大学助教(註 2022年当時)の「小鳥博士」と鈴木俊貴さんだ。「小鳥の鳴き声にも『文法』がある」。鈴木さんは自らの研究を「動物言語学」と提唱する。「言葉を持つのは人間だけ」「動物の鳴き声は感情が表されているにすぎない。」とするこれまでの研究に疑問を呈する。「人間だけが言葉を持つという誤解をどうやって解こうか。僕がやるしかない。そんな意気込みで2005年、研究をスタート」させた。「ジャージャーという鳴き声は『ヘビ』を意味する単語」ここまでたどりゆくの10年。さらに彼は、鳥が2つの鳴き声を組み合わせ、「文」で相手に意思を伝えていることも発見する。彼の研究は海外で同様の探究を行っている研究者とのつながりも創り出している。

彼らの取り組みに学びたいと思う。何よりも学びたいのは「リスペクトの精神」である。「人間だけが特別に高度なのではない。小鳥も進化の過程で、彼らに適した言葉を持つようになった。それを理解することが生物の多様性を理解することにもつながる」柴田君も同様の思いを抱いているはずだ。学問の根底に存在するもの、また、その学問を究めるために必要なものが何なのか、この2人の取り組みは私たちに大事な示唆を与えてくれている。(2022年度春 PTA新聞校長挨拶より)

「言語は人間固有のもの」という考え方はアリストテレスの時代から今日の時代までの定説であり、「動物の鳴き声は快か不快、そのどちらかを表すだけで、意味は持たない。」とされてきた。彼はこの文献の中でこう言う。「このままでは人類は『井の中の蛙』である。他の動物たちの言葉に気づかずに、自分たちが言葉を持つ特別な存在だと思い込んでしまっている。(略)井の中ではいずれ死に絶えてしまうだろう。井戸の中にいてよいのはオタマジャクシまでである。早急に助けなくてはならない！(略)これを成し遂げられるのは、世界中で僕しかいない！「動物はしゃべらない」という2千年以上にわたる史上最大の誤解を解き、井の中の蛙化した人類を救うために、僕は立ち上がったのだった。」

彼の研究の出発点はおもしろい。冬の軽井沢、誰かが鳥たちのためにまいたであろうひまわりの種を見つけた一羽のコガラが「ディーディーディー」と鳴いている。しばらくするとカラ類と呼ばれる同種の鳥たちが集まってくる。最初に声をあげた鳥は、仲間たちが数羽集まってくると、やっとそのひまわりの種を食べ始めたのである。仲間を呼び集めるために鳴いたのか？ただでさえ餌の無いこの時期に、それでは自分の

餌が減るではないか。生き物は自己の利益を最大化するように行動するのでは？摩訶不思議なこの事態。調べるよりほかはない。この後、3か月間、彼は山籠もりをして調査に没頭することになる。

今回のこの通信に「ずっと君の推しのつもりでした」というタイトルをつけたのには意味がある。初めのところで、「自分が密かに注目していた人がにわかに脚光を浴びる」とも書いたが、実は知らなかったのは自分だけで、その分野ではかなり有名な人だったことをこの本から知る。数々の著名な学術誌に複数の論文が掲載される、『ワイルドライフ』『ダーウィンが来た！』などのテレビ番組でも取り上げられてきた彼である。密かに私の推しであり、本の出版にあたって、「いよいよ、この人が注目される時が来た」と私はワクワクしていた。赤面である。「推しである」ことに変わりはないが、先頭を行くつもりでいたのには我ながら笑える。その列に加えさせてもらう、「仲間に入れてね。」今は、そんな気持ちである。

皆さんにも一読を、と勧めます。事実を解き明かしていく彼のワクワクがつまった一冊です。

さて、ここまで書いて、前述のPTA新聞の原稿の「柴田君」に興味を持っていてくださる方がいらっしゃるとうれしい。その柴田君の紹介をしたPTA新聞の記事で今月の校長室だよりを締めくくろう。

カブトムシは夜行性のはず、でも自分の家の庭には昼間もカブトムシがいる。「なぜだろう」その素朴な疑問から埼玉県の小学生柴田亮君の観察が始まる。カブトムシが集まる庭の木はアジア原産のシマトネリコ。柴田君は本を読みあさり、動物生態学を研究する小島渉先生と出会う。柴田君が自分の観察結果を伝えると、「深夜のデータやカブトムシの個体ごとのデータも取ったら面白いのでは？」と小島先生はアドバイスする。このアドバイスの仕方が良かった。「こうしなさいと言わずに、『こうしたら面白い』と先生が言ってくれたことで、自分も不思議だな、面白そうだなという気持ちで研究できた。」と柴田君。昨年の日々の観察は230回を超えた。この4月、小島先生は柴田君との連名で論文を投稿。その論文はこの分野のトップ学術誌、米生態学協会の『エコロジー』に掲載された。多くの研究者はデータの分厚さに「記録を集めた人間は賞賛に値する」と一応に驚いたという。



次年度に新学習指導要領導入を控えた全国の高等学校では、スクールポリシーの策定が急がれ、生徒たちにどのような力をつけるのかが盛んに論議されているが、この柴田君と小島先生の取り組みの中に、それが全て凝縮して表現されているように感じられる。「将来は何に？」と聞かれた小学六年生になった柴田君。「まだ決まっていない」この答えもまたいい。そうだ、じっくりと考えればいい。(2021年春 PTA新聞校長挨拶より)

こぼれ話—「猫がいる！シャーッ！」

鈴木俊貴さんの実家の庭にもシジュウカラの巣箱がある。大学4年生の時に鈴木さん自身が巣箱を作り、かけたのが始まりで、実に18年間、毎年のようにそこでヒナがかえり、巣立っていく。森の中に巣をかけると3～4割は失敗する。しかし、実家の巣は9割以上が成功し、全世界に誇れる数値だという。なぜか。都会ゆえ天敵が少ないか、いやいや、ハシブトガラスや野良猫など、天敵は森より多い。ではなぜか。この謎を解くヒントは親の行動にあったと鈴木さんは言う。親と言っても鳥の親ではない。鈴木さんの親御さんだ。

猫が巣に近づくと、お母さんが「シャーッ！」と叫び、箒を振り回して追い払う。シジュウカラの言葉がわかるご両親。「ピーツピ」シジュウカラが鳴くと、「猫が来ている！お父さん、追い払って！」お母さんが鳥の言葉を読み取り、お父さんが猫を追い払う！「見事な連携プレーだ。」と鈴木さんは言う。

シジュウカラはこのご両親に愛されているのか。いえいえ、愛されているのは息子の鈴木さん自身だ。この巣を守る親の気持ちは、きっと保護者の皆さんであれば、痛いほどわかることと思う。